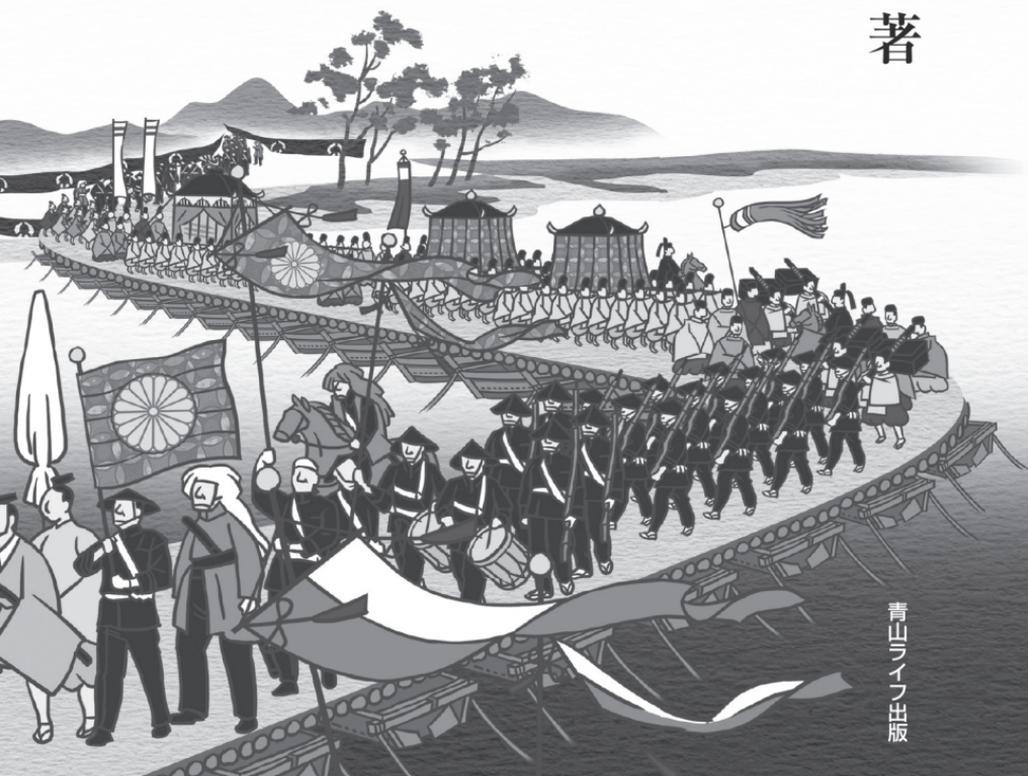


明治元年の大行進

石川興一郎 著



青山ライブ出版

◆ 目次

第一章	飯村城炎上から水戸黄門……………	5
第二章	奇人岡玄策と都々一坊扇歌……………	25
第三章	史館動揺の時代……………	67
第四章	政権闘争の時代……………	73
第五章	常野絵 乱の時代……………	93
第六章	天狗復讐の時代（戊辰戦争・新しい夜明け）……………	121
第七章	北島秀朝の生々流転……………	137
◆ 主要参考資料	……………	174

第一章 飯村城炎上から水戸黄門

下野国芳賀郡飯村に何時ものように静かな朝がやって来た。聞こえるものは小鳥の囀と小川のせせらぎだけであった。

下野にある河川の多くは南東に向かって流れる。しかしこの小川は北西に向かって流れる為に、いつの頃からか逆川と呼ばれるようになっていた。

山のすそ野には、ほとんど世に知られていない飯村城があった。当時そこには飯村家宗と宗廉の兄弟一家が住んでいた。そこに天正十八年（一五九〇）のある暑い夏の日、土煙を上げながら一頭の早馬がやって来て小田原決戦は豊臣秀吉に軍配が上がったというのである。しばらくは何もなかったが、この日にまた那須氏の家臣沢村五郎というものが馬蹄音を轟かせて早馬でやって来た。

「豊臣秀吉軍が攻め込んでくる。しかし我々は戦を避ける」

と告げると直ぐに何処ともなく立ち去ったのである。風雲急を上げる知らせに飯村兄弟一家の対応は早かった。何頭かの馬で那珂川西岸まで出ると、渡吉を捜した。渡吉は畑仕事をしながら竹細工などを拵えていたが客が来ると渡し舟を出したのである。

渡吉は直ぐに見つかり、飯村兄弟一家は渡し舟で那珂川東岸に渡った。訝しんでいる渡吉に飯村城の城主であった飯村家宗は、

「あとで身内のものが誰か来るであろう」

と言って、馬の預け代も含めた舟賃を渡した。

そして飯村兄弟一家は、雲松寺を目指した。このような時のために宿の提供を事前に頼んでいたの

である。黙々と歩き寺の近くになったところで兄弟一家が後ろを振り返ると黒煙が上がっていた。

すると、何かが風に乗ってふわふわと落ちてくるのが分かった。宗廉が手に拾い上げてみると、ずしりと重みのある炭化していない杉枝だった。火の勢いで空高く舞い上がった杉枝が南西の強い風に乗って優に二里は越えるこの場所にまで運ばれてきたのであった。そこからすこし歩くと雲松寺に着いた。その時に庭にいた寺の別当は、飯村城付近から立ちのぼる黒煙の方をみていたので、

「ごらんの有り様で、一週間ほど宿泊させて頂きたい」

と飯村家宗が頼むと別当から空いている座敷二間を案内されて飯村兄弟一家は、静かな山寺でしばしの小憩をとった。

はたして飯村城は燃え落ちてしまったのであろうか。おそらく、そうであろうが黒煙と杉枝が飯村兄弟一家の脳裏に永く焼きついたのである。東山雲巖寺も炎上してほゞすべてが烏有に帰した少し前の出来事であった。そして炎上したであろう飯村城跡には、後年明治の世になってから逆川小学校が建ったのであった。

しばらく寺に寄寓したころ、飯村宗廉は思うところがあり少し北西方面にある寺か神社に行つてみたいと別当に要望すると、

「私は鷺子山上神社の神主は、知っているし、社務所には座敷もたくさんある」

といつて達筆の紹介状を別当は宗廉に渡した。一週間ほど世話になったことの礼を述べて翌日は、朝早く鷺子山へ向かったが、思った以上に起伏がある土地柄のため、途中で農家に寄寓して飯村兄弟

一家が鷲子山上神社に辿り着いたのは出発から翌々日の午後だった。

飯村宗廉は、ことの顛末を神主に伝えて紹介状を渡すと、ここでも座敷二間に案内された。宗廉がこの辺で馬は借りられるのかと神主に尋ねると、

「馬頭村は、少し遠いから、この山から南東側に降りていった小田野という所にも何頭かいる。少し荒っぽいのが多いから試乗してから乗る馬を決めたほうが無難である」

という神主の指南があった。その時に宗廉が馬を求めた理由は、保内の生瀬に行つて見ようかと考えたからである。

常陸国小栗御厨ノ庄大関郷出身の大関氏といえば、大田原氏とともに那須家臣団の両翼を担っていたが、その大関氏が個人的な理由から千本父子を討伐する謀略を練った。それは主君の那須資晴を味方につけた上での策である。大関は、三四年ほど前に資晴の叔父が千本氏のために成敗されたことの仇を晴らすことを勧めたのである。初め資晴は賛同しがたかったが、大関の強い要望で渋々承諾したのである。

そこで資晴は、初め茂木氏に協力を要請して断られた。次に大関が滝太平寺の別当に協力を要請した。ここでも断られたが無理やり脅迫して、滝太平寺の別当に千本父子を誑かして誘い出すことを承諾させたのである。千本城に着いた別当は、

「上那須の家臣何人が敵側につく謀叛があったので、それを討つための相談が私の寺であります。

かならず八日の五ツ半に是非とも来てくださいとの事です」

と大関の使者である旨伝えて帰った。天正十三年（一五八五）十二月八日、なにも知らない千本父子は、滝の太平寺に着いたのである。出迎えた別当が、

「内密のことなので二人で奥へどうぞ」

というので、薄暗くなった奥の間に入ったところ、突然、福原安芸守が千本資俊に斬りかかり、千本十朗資政には大田原三河守が襲いかかった。なおも資政が仁王の形相で大田原三河守に反撃しようとしたところ、大関が間髪をいれずに止めを刺したというのである。

騒ぎに気づいた門外にいた千本氏の家臣竹原・田野辺・高梨ら十七名は、座敷に入ったところ大勢いた大関の家来に大方討たれてしまったという。この滝の太平寺の変で千本氏は滅亡したのである。

事が成った大関・大田原・福原の三兄弟は、千本氏領を分割して知行することを那須資晴から許された。そして千本城には、一連の内情を知っている宇都宮氏系である茂木氏の四男四郎義政が継いで、千本大和守義隆を名乗ったと言われている。また、滝の太平寺の別当は、当初の約束通りに千本領の大谷津村を給せられて還俗後は大谷津周防と称した。

その千本城に千本義隆が入ってしばらく過ぎたころ、近くの飯村兄弟のいる飯村城にやって来て、「保内の生瀬というところに、石井というなかなか面白い人がいるそうだ。何かあったら仲間にならないか」

と言ったことを、飯村宗廉は覚えていた。それは四年ほど前の出来事である。そこで生瀬の様子な

ど、自分が先に一人で行って窺ってこようと考えたのである。宗廉が兄の家宗に話したところ、

「この空模様だと明日は雨だ。急ぐ必要はないから天気の良い日に行けばよい。それと、ただ飯は気が引けるから麓で米を買って馬で運んでくれ。緩やかな道の方なら沢山積めるだろう」

などと兄が言うと、その通り翌日は雨が降ったので宗廉は、宗安など子供達に読み書きなどを教えた。使い古した包み紙を神主から受け取り、宗廉が簡単な文字を子供達に書いてみせると、それをみていた神主から、

「なかなかの達筆、文字に真剣みがある」

などと言われ、後から神主は御神籤づくりを宗廉に依頼した。当時は文盲の人が多い位の時代で、文字の読めない人は、少数の読める人のもとで内容を確認したものである。そういった場合に読めない人が見る文字の印象が宗廉の筆跡はふさわしいというのが神主の持論であった。

しばらくすると、離れの作業小屋で策などこしらえていた家宗が戻ってきて文字を書いてみせると、神主は写本作りを家宗には依頼した。一方、御神籤の大吉など雛型を写写していると宗廉は、気分も晴々としてくるのであるが、仏滅の書写は気分も落ち込むのであった。そこで仏滅だけ兄に頼むと、「そうだな、半々にしよう」

と、神主の許可をえてから御神籤と写本作りを飯村兄弟は共同で行った。次の日も小雨だったので兄弟は、黙々と書写を続けた。その出来ばえの良さに神主は感心しきりであったが、飯村兄弟は見慣れた文字よりも使われる紙質のすばらしさに驚いた。繊維が緻密である上になめらかで光沢があった

のである。鳥の子の紙として有名になるのは、そのすこし後であった。

明るる日は、雨はあがり快晴というより濃紺に近い素晴らしい空が広がっていた。

帰りに米を忘れないよう家宗が伝えると、宗廉は馬を借りて保内の生瀬というところに向かった。そして子供たちのおやつ頃に馬に米を積んだ宗廉は戻った、

「生瀬の石井興十朗という人に会ってきた、ちょうど空家が一軒あって、がらくたを片づける必要があるので十日もあれば住めるだろうとの由、馬を返してくる」

と言って、山を下り小田野へ向かった。家宗は米を神主に渡し、宗廉が社務所に戻ってきたころに出来上がっていた夕食は、いつもより献立が一品多かった。翌日から十日ほど飯村兄弟は、写本作りで打ち込んだ。そして八十年余りの月日が流れた。

延宝元年（一六七三）八月二三日に徳川光圀は、勿来関を皮切りに三度目となる領内北部の巡村をおこなった。北嶺の村々から愛宕山に登り、二九日の東金砂山を経て九月一日は武生山から峰越えで保内郷地方に入り、頃藤の長福寺に宿泊。

二日は下津原から帆立船で久慈川を遡上する。途中で鵜飼や投網をしながら川山まで帆立船で遡上。下野宮で陸に上がり、奥の真木野、矢祭山を経て町附村に至った。

そして当時、飯村宗雪という筋者が町附村にいますという声は光圀まで届き宗雪宅は今宵の宿となった。八十年余り前、鷲子山上神社に寄寓していた飯村宗廉宅は宗安の孫で俳人のような名前の宗雪の

代になっていたのである。

ところで、鵜飼は川魚と鵜がいることで成り立つ。常陸の北の海岸には鵜ノ子岬があり鵜もたくさんいたであろうことが偲ばれる。今でも遙西方の鵜飼では五浦近辺の鵜が用いられるという。この日の光圀の鵜飼や投網は、本場の醍醐味が堪能できるものであった。

三日に光圀は近津神社のある上野宮を経て八溝山に登る。下山してまた町附村の宗雪宅に宿泊。光圀は酒肴のあと宗雪に尋ねた、

「慶長七年頃に生瀬で起きた乱とは、いかがなものか教えてくれぬか」
すると宗雪は遠くをみる表情で、

「何分私の生まれる前の事で、よく存じませんが祖父宗安の話によりますと、年貢かなにかの勘違いから多くの村人が成敗されたとの由です。人数など定かではあませんが、近くの高柴村岡ノ内坪の深沢には地獄沢とか嘆願沢、刃拭き沢、それにお墓の名前のような耳塚とか首塚、胴塚とか今でも呼ばれていますから、少なからずのものが成敗されたという言い伝えがあります」

宗雪の話聞いた光圀は、

「これからは二度とそのようなことの起きぬ世にいたす。ところで明日は相川というところから山通りで烏帽子掛峠あたりを横切り鷺子山に登るつもりだが……」

との予定をきいた宗雪は、

「あのあたりは、自然が豊かで良きところです。ただ時節がら藪蚊が多いですからお気をつけ下さい。

木綿を縄のように編んで先の方に火を付け、直ぐに消して燻すことで煙を靡かせていると藪蚊も近づかないとの由です」

それを聞いた光圀は、

「それは良い。供のものにもたせよう」

と言つて自らつくり出そうとしたので、宗雪は慌てていくつか用意して試しに庭で燻していた。

四日は冥加から下金沢を経て、上金沢の金沢道場の近くにある浄土真宗の祖である親鸞の孫である如信上人の墓に詣でる。その後は相川から山通りで常野の国境を越えて大那地村に入る。この付近は太閤検地までは常陸国と下野国そして陸奥国の国境であった場所になる。すると烏帽子掛峠のやや北より付近で現地案内人の二人がやや緊張した面持ちで待っていた。光圀一行が近づくと、

「現地案内人の大森平太と申します」

「同じく、笠井善一郎と申します」

と簡単な挨拶を済ませて、案内人である二人は先頭を歩くことになった。二人とも体格の良い方であったが六尺豊かな水戸の黄門様（現地では光圀をこう呼ぶ）には、その体格のよさに少し驚いた様子であった。鷲子山の裾野に着くと黄門様の足が止まった。そして、

「ほほう、話には何度か聞いていたが、これは立派な杉山、このようなものは初めて見る。これは後世のために残すもの」

と云って、裾野から中腹を確認のうえ、保存林としての線引きのようなことが行われた。それが済むと一行は、昼なお暗く冷気の漂うなか頂上を目指した。鷲子山上神社の境内に上がると急に明るくなった。

鷲の山やまより山へ入ぬれハそらふく風の音はかりして

西山

左手の石段の先に本殿はあった。石段の前で大森平太が説明する。

「この石段の真ん中は、国境になります。向かって右は常陸の国、そして左は日光東照宮のある下野の国です」

すると黄門様は、

「これはこれは、なかなか面白き石段、どちらを歩くべきか悩みそうじゃ」

と言って石段の真ん中を颯爽と登って行かれた。本殿付近にはさらに大きな千年杉と呼ばれる大木があり、その幹回りに張られた縄を黄門様は珍しそうにみていられた。

杉と縄の間に寛永通寶などが挟まれていたのである。

下山は矢又口に出て武茂郷を順村し九月七日に一行は黒羽河岸から水戸へと帰路についた。那珂川を上り下りした多くの船は小鵜飼船という。その大きさは長さ八軒、幅が中ほどで六尺と光圀の上背くらいあり船底から船縁まで三尺五寸ほどで炭俵であれば二百俵はつめたという。